みいけ主婦会

※原稿送り先＝大牟田市不知火町2丁目　三池炭鉱主婦会
※電話で知らせるとき＝市内3033・7140　炭鉱・474・528
※責任者＝文教部長　下川秀子

＝幸せは闘いとるもの＝

若林所長にみせたい 内職する私たちの生活

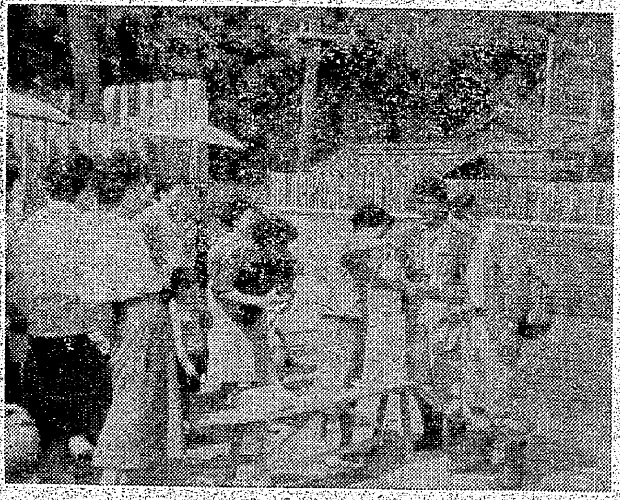
紅葉ガ丘分会　大佐古さよ子

「お早よう。いまからね　ご苦労さん」とあいさつを交わしながらこどもたちより早く勤めに出て行かれるAさんの後姿は、なれない仕事のためかめっきりやせた感じです。合理化の名のもとに首を切られた指名者、賃下げによってそのしわよせを背負わされた三池の労働者―なんともいえない会社にたいしての憤りを感じているとき、Aさんのこどもが母親のいない家へ向って、だれにいうとなく「行って来ます」といいながら学校への道を急いで行った。こうしてまた学校から帰ると、遅く帰る母親のために七輪をばたばたとあおいでいる。このこどもの姿を若林所長に見せたいものです。

賃下げと労働強化によって組合員や家族がいかに苦しんでいるか―！社宅の主婦たちもひとり二人と内職の勤めに出て行くものがふえたし、また、一生懸命内職の仕事をさがしている人たちがたくさんいるのです。いまの賃金ではどう辛抱しても食べていけないので、家族全員が生きて行くためにどんなに努力していることでしょう。それは私たち三池労組員ばかりでなく、同じく搾取されながら働いている第二組合員も同じく苦しんでいると思います。

ある店の集金人さんが「なかなか金がはいらない」とこぼしていることでもわかるが、これでは食べていけないといっている第二組合員もたくさんいます。やっぱり同じ労働者だから賃下げは身にこたえるはずです。生活を守るためにはたたかわなければ生きて行けない資本主義の世の中です。ひどい労働強化、差別攻撃の中でがんばっている夫とともに、主婦も明日への「しあわせ」を築くためにどんなに苦しくともがんばらなければならないと思います。

全国の仲間とともにたたかいの中できずきあげた力をさらに強めほんとうの家族ぐるみの闘いの火を燃えひろがらせましょう。



8・9日行われた四山での激励慰問

闘いをかえりみて

宮浦支部通松分会　杉田幸子

労働運動史上最大の闘争といわれた三池の闘いがはじまったのは一昨年の酷暑の夏!!　会社が提案してきた賃金の分割払いからはじまり、焼けつくような炎天のもとで私たちは会社にたいする抗議行動をつづけるとともに、闘う態勢を固めたのです。

一方的に希望退職を募集した会社は、厳寒さをおぼえる十一月指名解雇状を郵送し、あわただしい年の瀬も迫った十二月、指名解雇状を再び郵送したのです。このため私たちは「去るも地獄残るも地獄」の合言葉を胸にきざみ、拒否者をはげまし、助け合いながら、やがて迎えた正月も終った一月二十五日、会社からロックアウトを宣言されました。それに対決し長期闘争を耐えぬくことを誓いながら、雨の日も風の日も闘ってきました。

三月に入って一部のスト反対者が組合を脱退し第二組合を結成しました。会社は第二組合員だけロックアウトを解除し就労させたので、夫たちは各鉱門などのピケに動員され、一層闘いは激しさをまし、久保さんの刺殺、警察の不当弾圧などいろいろな事件が繰り返えされ、私たちは今更のように敵の悪らつさに憤りと憎しみを強くしたのです。

省みれば分会長や組合員を逮捕する、あるときは何も分らぬ子どもが「物を買ってね」とねだるときの苦しい思い、またある日は食ぜんを囲み家族会議をひらいたことが幾日かありました。一万円生活の台所を守り、私たちは一わの野菜、一ぴきの魚を買うにも何軒もの店を回り、安い店から買うようつとめました。

こうして激しいたたかいをつづけ、いまも激しい差別、切りくずし攻撃とたたかっている私たちですが、内職でいそしむ主婦、無邪気に遊んでいる子どもたちの姿は何かしら強く胸にうたれるものがあります。

たたかいは終ったのではなく、ねばり強い抵抗のたたかいがつづいているのです。差別切りくずし排除、保安を確立し明るいゆたかな生活を築く私たちの闘いの火は消えないでしょう。

新たな決意で

三川　永尾ヤツエ

すし詰めにされたバスがやっと玉名に着くころは、雨は横なぐりにひどく降ってきた。降りたった湯の町玉名は、昨日からの春の温泉まつりで、町々には赤や黄のはなやかな飾りでいっぱいだったが、それも雨の中でヒタヒタとわびしかった。

ぬかるみをさけながら緑の木立の中にあるいかにも古風な玉名裁判所へ歩いた。

どうしようもない重々しい気持で私は法廷にはいった。被告十五名がそろい傍聴者が着席をすると、まず五島三川支部長のあいさつ、被告団代表のあいさつ、それに本部民本さんの激励の言葉が交わされたあと、三浦弁護士から簡単にいままでの経過とその日の予定が説明された。

昨夜からの心配と不安な心もいつしかスッキリし、私は落ちついた気持ちで開廷を待った。午前十時四十分平岡裁判官の姿が現われ、Cグループの第三回公判がはじまった。開廷と同時に被告団を代表し、前回三月二十九日はちようど久保さんの一周年忌にあたり私たちは同志愛をこめて黙とうをささげたことにたいする弁明をおこなった。そして、いよいよ被告の意見の陳述が行われた。

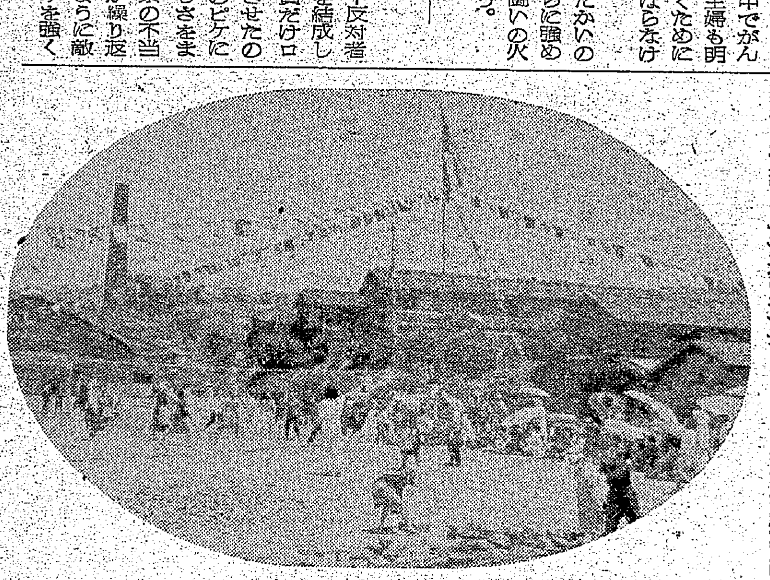
まず主婦会結成以前の姿と、組織の目的とその活動状況、また三池闘争の本質について、三池に加えられた不当な弾圧について、十五名の被告は名誉と伝統ある三池の組合員・主婦会の一員として、心の底から怒りと抗議を堂々と、ほんとうに一人ひとりが勇気をもって発言した。いままで一回も人の前で話もしたことのない主婦が、裁判長、検察官の前で、つたない表現ではあっても、素ぼくな言葉の中から警察、独占資本・暴力団、第二組合にたいする限りない憎しみと真実の声を、涙ながらに懸命に訴えた。そして、第二組合、警察、検察庁の共謀でデッチ上げられたことを理解させ、また、裁判官にも不当な裁判は絶対に許さないぞという意気を示し、裁判官の頭をすこしでも正しい方向へ向くよう努めた。

そして私は、子どもの未来をつくる母親、正しい歴史を築き上げる人間として、この公判闘争をたたかいぬいていかねばならないと強く感じた。

法廷での敬称の問題も当然のことではあるが、かちとることができ、いままで呼びすてにされた被告も、「さん」「君」をつけて呼ばれるようになった。これもさ細なことのようだが、これも一つの成果であると思う。

いろいろ便宜をはかって支援して下さった司法労組玉名支部の仲間たちに感謝し、雨天にもかかわらず多数傍聴をして、心からともにたたかっている仲間と力を合わせてがんばろうと決意を新たにした。

×　×



団結旗ひろうのバレーボール大会

青空の下で球技

通松

【主婦会通松分会発】四月三十日通松浴場前はメーデー前夜祭として早朝からはしゃいでいました。地域分会、主婦会、サークルスワン共催の〃団結旗披露〃のバレーボール大会です。

コートの片隅に高い掲揚台が立ち分会旗が朝日に輝く午前九時半、分会の全員がつどい寄りました。廃品回収売上げ金で購入した団結小旗が連綱で四方に張られた。赤とエンジのめうと旗を交互にゆわえたさまを見上げたとき、ほんとうにファイトがわいてくるのをおぼえます。

主婦会から競技はじめ、元気よく〃エイツ〃とばかりサーブ晴れた五月の青空にボールははずみます。

「ワン、ツー、ラスト」がんばれ!!

「あらっ、ネット・タッチ、まけとこ」とかけ声にぎわしくはり切ってプレーをつづけ二十対二十一好天気にさいわいして競技は最高調です。

リーグ戦でいずれも三回戦となりみんな愉快でした。

私も四十二歳になってはじめて手にするバレーのボールです。夫も子供も笑って応援しました。

競技にさきだって受けた主婦会支部長や地域分会長のあいさつの期待を裏切ることなく、明るい楽しいレクレーションでした。

きょう披露された団結小旗は、明日のメーデーに持って参加し、そのご各戸にかかげます。

誇りある三池労組のしるしとして輝き、第二組合員の反省をうながすことでしょう。

三沢ピクニック

本所支部青年婦人部で

【本所支部発】昨日まで梅雨の前ぶれかと思うあつい雲におおわれていたが、きょうの雲はうすい。きょうは晴れるとひそかに自信をもつ。

五月七日の本所支部青年婦人部の自主的な合同の行事は最初であるわれわれのこの行事の内容充実への努力が、つぎつぎにおこす行動の基礎になることを思うと、いささか責任が重い。しかし、他支部には見られない美しい組合員が、大挙して参加することを思うだけで楽しい。そしてきょうは、バービキユウ（野外料理）をやらかすというからますますだ。

午前七時、大牟田駅前鉱人像の下に集合、三十七分出発―九時四十分ごろ三沢に着いた。

日曜のせいもあってか、大勢の人びとが電車を降りて、三々五々グループを組んで行く。

婦人部、青年部から五名人選してバービキユウの材料仕入れをする。たれかがきようの福引券を見つけて来た。特賞は〃ステレオ〃だという。「その券はタダかね」とたれかが問う。「そうだ」との返事に全員がもらいに行く。

ピクニック・センターでは案外と風がつよい。飯ごう、コツヘルで全員食事づくりに取りかかる。ゴーセイな食事だ。ライスカレー、野菜サラダである。「こんなゴーセイな食事は家では食ったことがなかバイ」と叫んだ男がいた。

食事がすんだあと、みんなで歌をうたう。腹いっぱい食ったためか合唱の声に力のあること。ピクニック・センターに来合せていた人たちが、うらやましそうに見つめる。ましてフオークダンスをやったために大勢の人だかりをみた。ハナ高々だ。われわれの労働者としての誇りと自信が、強くわれわれの体内によみがえってくる。明日からまたがんばろう。とみんなで誓い合って帰路につく。

大牟田地区安保破棄共闘会議主催の 中国映画〃あらし〃

活動を再開した大牟田地区安保破棄共闘会議では、その活動のひとつとして、五月二十日大牟田銀星で中国映画「あらし」を上映することになった。

「あらし」は、中国・京漢鉄道労働者のストライキを記録したすばらしい天然色映画であり、ソ連の天然色映画「三本指のおおかみ」が同時に上映される。

前売券（一〇〇円、当日一三〇円）を各支部教宣部で取扱っており、益金は共闘会議の活動資金にあてられることになっている。

ストーリー

一九二三年の夏、京漢鉄道（北京―漢口）警務署長の父親は江岸駅の近くで列車事故にあった。署長は勝手に労働者の黄徳発に凶悪犯の罪をきせ逮捕した。

京漢鉄道の労働者で共産党員の林祥謙と、やはり共産党員で弁護士の施洋は労働者大衆を動員して黄徳発をたすけた。

まもなく林祥謙と施洋は労働組合を組織し、夜学校をひらき階級教育をほどこした。そして労働者の孫玉亮や黄徳発、呉伯林なども積極的に活動するようになった。

林祥謙は、京漢鉄道総工会をつくるために、漢口、てい州、長辛店と連絡にいそがしくとびまわりながら、施洋を法律顧問にむかえ軍閥呉佩孚と合法的な闘争をおこなった。

一九二三年二月一日、てい州で京漢鉄道総工会の成立大会を開く準備をしていたが、軍閥呉佩孚はてい州警察局長の黄殿成にこの大会を禁止させるよう命令した。この命令を知った代長たちは憤激し、らく陽にいる呉佩孚に談判におもむいたが、かれはガンとしてきかないばかりか、黄殿成とてい州に駐在する第四師団長靳雲鶚に命じて、成立大会の会場を包囲した。

このとき、施洋は軍警を前にして「……お互いに貧乏人同志じゃないか、どうして兄弟たちに銃をむけるのか……」と説得した。兵隊たちは大きな感動をうけた。そのとき老何は銃をうばいとった。

二月四日午前八時、汽笛を合図に、全工場の労働者は工場からはなれ、全線の労働者も仕事を停止して、京漢鉄道はまったく断絶してしまった。

二月七日、呉佩孚は、武装兵二個大隊を出動させ、ぎゃく殺にのりだした。ぎゃく殺は江岸、てい州、長辛店と京漢線全線にわたって行われたが、一番ひどかった江岸駅では三十二名が殺され、二百余人が負傷した。

江岸駅分会長の林祥謙は、大木にしばりつけられ「スト中止の命令を出せ」とせまられたが「首をはねられても、血を流されても、わが分会は総工会の命令がないかぎり就業しない」と断固拒否した死刑執行人の手にあった大きな刀は振りおろされた。「軍閥を打倒せよ！」「帝国主義打倒！」「労働者階級万才！」と叫びながら、ついに江岸駅分会の英雄的な指導者、中国鉄道労働者の先駆者林祥謙は労働者階級の最後の勝利を信じ、労働者の団結、組合の指令をまもるために尊い生命をささげた。

【スタッフ】監督・脚本　金山
撮影　朱今明
【キャスト】林祥謙…李翔、施洋…金山、孫玉亮…張平、老何…呉雪、林祥謙の妻…田華